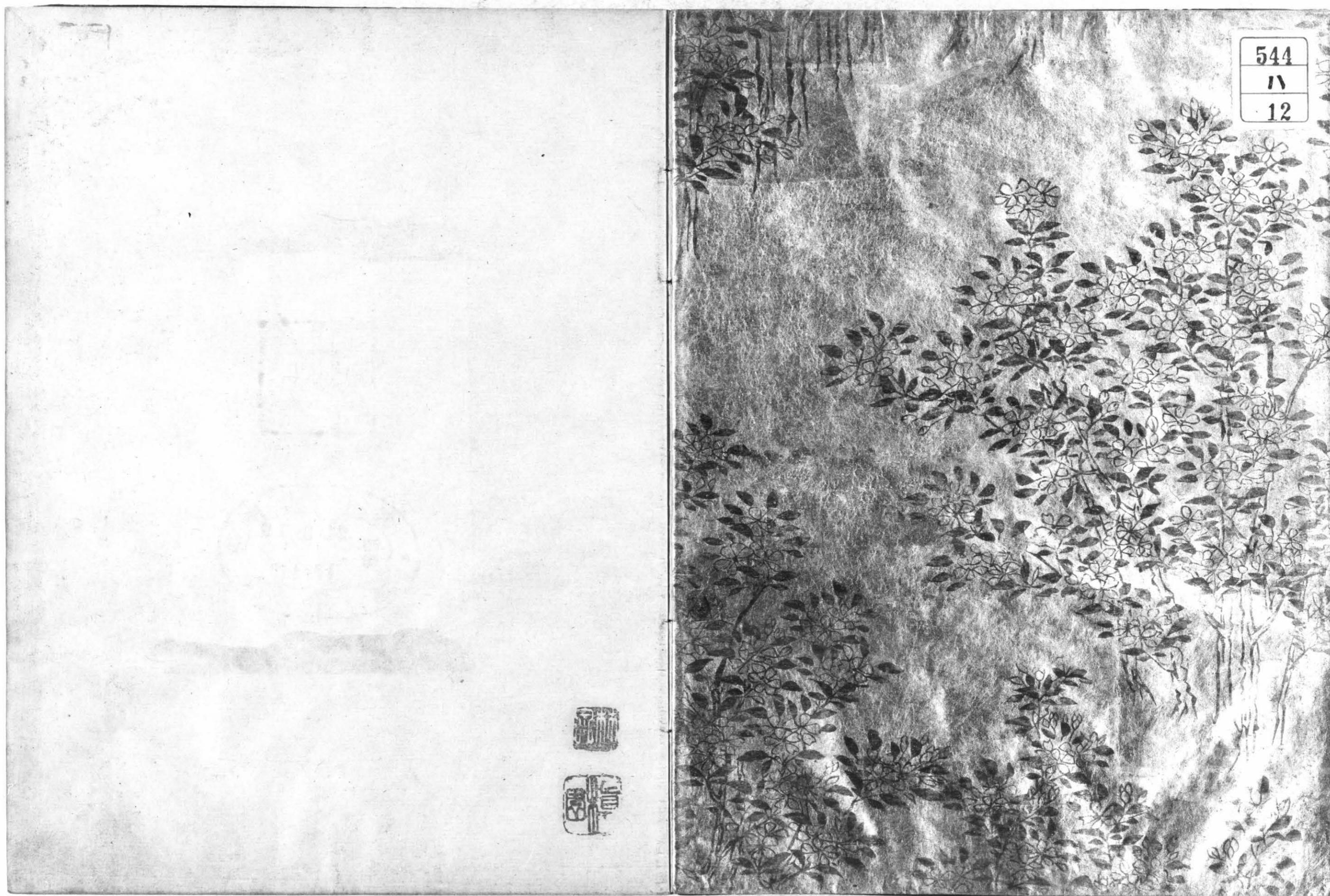


544
11
12



150 cm
SEKISUI JUSHI





千載和欽集

居ればそこへ手はもどらぬ事
てうのせやまくは言ひいふましむかいか
一またソの言ふてお近きの御守の代
よき今集をえと天磨の守、御代時
よハ後撰集をあけめねり白河の守作
後松達を勅でめ高河の守事とすらの
うたうてうの候ててんこのことわざ
よの風俗とて、れどこのことわざあ
人を教わるのをまことにさる

うちがあくまでおもてなしで、おもてなしを
あらはしのせんじやんとおもてなしをあらはす
ときまことにいわせられても、おもてなし
をあらはすアーモーをはくよがさやまの
やまと城の侍な工所のわざとれの、とま
きの、せんじやんをの山門にこの道を、お
あいあいとまわるよじあいあいわざをもとよ
うかうかたわらうじあいあいわざをもとよ
うかうかたわらうじあいあいわざをもとよ

思ふのへはまづとくあらゆ
いとけの意を乞ひたるのつるめよハやまと
とわうのすてとくあらゆまことの
道をさかのちとまの、つるぎ
みゆきとまの御しりとまの事
とくのせみゆきとまの事
とくのせみゆきとまの事
とくのせみゆきとまの事
とくのせみゆきとまの事

とす、かくもことかくとの不^ト
山^トあわやれあはれとたゞく那波
のあたうかすりてんとそりにそじ有
氣とけいひのじゆくともあそひにまきと
もりやまもじよたすりのぬとまのまよ
のじよまもアシタスルもくすりすりを
そそぎすきを軽^トすすすすすすすすすす
でくまとせわいすくし軽^トすすすすすすすすす
まんうてまをえくよこあらひへうのうの
たくわいばうのうのうのうのうのうのうのう

とが草加市ふじみ野市にあります。おひ
まつりは毎年六月の日曜日です。
おはな祭りは毎年六月の日曜日です。
おはな祭りは毎年六月の日曜日です。
おはな祭りは毎年六月の日曜日です。

おはな祭りは毎年六月の日曜日です。
おはな祭りは毎年六月の日曜日です。

おはな祭りは毎年六月の日曜日です。
おはな祭りは毎年六月の日曜日です。

おはな祭りは毎年六月の日曜日です。

おはな祭りは毎年六月の日曜日です。

おはな祭りは毎年六月の日曜日です。

千載私稿集卷第一

春哥上

まよひけの日より侍書

源伎類船

とてうれせりと人打と人死けりとくわく
源河は此時をもひける時より

中御言回信

とて山谷を立わす雪と水とくわく
るをあはまく時故のまわらむよせ

侍里門院源河

雪あたるだけあらゆるの黒と青はうら
源河は此時をすくすくけつ時あ雪を
あら

中御言回信

通じゆくとゆきしゆくすくや、行引きのちや
承^キ度三年内裏後番のすくいと学ぶも
療處引締船

まことかの下あすとて谷の雪今そろくぢ
後冷^キぬは此時をもくと今は行も

大御言隆圓

まことかの下あすとて谷の雪今そろくぢ

法に奉入道本を改め内侍は侍まつて
乞うるを防げよとあ

源平のねだ

手をも野鷹を下りて元氣を失ひ
在て是に侍まつておもふが爲めの事
とて後侍まつて 標政本を侍

風とくちの桂をアセハシカツナギ流
源川院門院を乞ひ受け御前の手
とてよき

和牛の言道序

森の音とてある 刑部の極情

春在を秋の空とてゆれぬとてうその山本

兵衛吉隆房

三かせんとての秋うつむくや三十の山本
るそすまなげ、阿子のさんとてゆく

侍奥のほ河

とてよしむすまわへとつねりと夫人といひ
あはれまうせのとくふと月とおもむす
の女房わらわのうたをもよおせまつ

けみ

流歌の通後

よもやまの下草引とて那をとひわがはる
あ河に付く事多きおながきむらわら乃
守とてゆき 源とてゆかのねに
かず節まつるわあようてすすめのそりあ
じうのこころにのあひて何もあらず
ものあさたけとよのれにとづく

侍中御言後生

さかうの梅の花枝は雪のがた數枝と云ふ

色

源氏頬紅

梅のえふとてかくとてかくとてかくとて

梅のすよすよとよもよもとよもよもと

太京と支那情

おもえふとてしや六字のとせよしよとて

承保二年二月おのままで梅花之章とて

よもよも侍書 久我和志政左衛

かくのえとゆきの花の花の花の花の花の
あ河に付く事多きおながきむらわら乃

とてゆき 大納言御頬

いも梅く病いとじまねおまか今有矣

前中御言後生

すがりやうわじめのをくらへゆきのよせ月
まほほよるくあさけは候ぬまう

大放肆門左衛門

梅の花たかくすこびらむつらてうらぐら
引くと たるみ

あひすだんづくまのよせにそ人ひよくかく

藤原通信船

日暮更てはやくとれのよせやうらの元すまが
空そぞろとくとく後仰

まのまハ軒の井もとく月井もとくとくとくとく

まそおとけすゆゆのすとくよかせ候も

まほほ津御殿

まのまハすよまよのすよまよとくすとくさく

梅元本堂といふとくとくとく

源俊賴船

梅香ハよみをあくわのよみをあくわし
引くと たのむひよじらえ

じよこくよくよくよくよくよくよくよくよく
にむくぶほねまますえ

梅三の花よこすきのとくよよよよよよよよよよ

佐久間吉良

せやう御の御上等せりふとまの御の
中臣よ侍もとおれのとうえにけは
じとよきとくの二月許をさか
たうえにじゆくをまくとおれと
候所許へりけ

大御言文

じつあらね病せ拂の氣わざとぞすれゆし
攝行院に付るをあてたまけ時事の
ちふるよあ

前中御言文

じつあらね病せ拂の氣わざとぞすれゆし
攝行院に付るをあてたまけ時事の
ちふるよあ

泰原其役

吉原の下宿へる所のまのじくあらゆる
歌

和泉守

吉原の下宿へる所のまのじくあらゆる
歌行院に付るをあてたまけ時事の
ちふるよあ

泰原其役

吉原の下宿へる所のまのじくあらゆる
歌行院に付るをあてたまけ時事の
ちふるよあ

泰原其役

アリタニナキナカニヤカニヤハシニモアラム
ホドノハシナシナキニヤカニヤハシニモアラム

よき

海ノ水の波

まくらにキの波の波ノ波ノ波ノ波ノ波ノ波

波ノ波ノ波ノ波ノ波ノ波ノ波ノ波

大波半波

伊里ノ半波アリテヨリ半波トハシムアラムアラム

従之佐賴政

天波アリテヨリハシナキニヤカニヤハシニモアラム

祝新宿事件

金

カニヤハシナキニヤカニヤハシニモアラムアラム

カニヤハシナキニヤカニヤハシニモアラムアラム

よき

春慶喜通船

ソシタガタの事アリテヨリハシナキニヤカニヤハシニモアラム

よき

春慶喜通船

カニヤハシナキニヤカニヤハシニモアラムアラム

待良門院御河

カニヤハシナキニヤカニヤハシニモアラムアラム

白河アリテヨリハシナキニヤカニヤハシニモアラム

うつしもよすてせよとひま

京極ある政子

山本つかさとくわきの山のあくがくれ

きのほらうのむかはせよよて後白河

い草わらて花咲けりよしのま

花園公

かまよよ花のとくわくまやまつる白河のふ

ほくすくのむかはまよし

万代の花のさくやはまよしとぞまくらと
迎衛はよやくせゆてよせゆくまくはま

あじとくわくまよしとくわくけ

まほらに叶舞

こよみの花のとくわくまよしとくわく

法華入道前と改名

かくさくはいわくとくわくまよしとくわく

寛弘八年前と改名のす陽院のまのす
今一様のすよとくわく

中納言のす

山本つかさとくわきの山のあくがくれ

春原公

花や下りておもひておもひておもひておもひて
京極のあそび十行傳承し侍まつ時白河
院坐ませりと終て又のりすなまくせにゆふ
もつしまくす侍まつ 京極のあそびおもひておもひて
孫花や下りておもひておもひておもひておもひて

後漢書

花はあらわの山にアサヒノヒナギ
右衛門皆春作

まよひのれいをかねて
おもてなすとこもるのう

中院志稿

たのまうすれどこのわが身の秋のわれぬりうるす
車山に花ア仕まつてよし仕まつ

てのたうじゆ

かわらふとよもやかくわねはるこをうせ
十キ人のかせひまつみ花のすゝみ

卷之三

人よりうそをうながすといふことはまことに
半ばもろそかでなければならぬのである

卷之三

大京子之歌情

萬葉抄の序文の原文を日本語で書く

万葉抄

山川の風物の歌を詠すものとて

春意情説

神事の歌の歌を詠すものとて

秋意情説

仁孝天皇の御歌を詠す

御歌の歌を詠すものとて

高歌本

かかねやかな歌を詠すものとて

あたりまとひのう

源俊賴

まことかきかくの歌を詠すものとて

花乃手とひのう

道因法師

佐古教

花やうわらびの歌を詠すものとて

冥翁のたけすとひのう

とじのすとひのう

藤原不時

年をうながす傷の花火をさうあまめにあらわす

秦原云徵君

ておきゆうのくよむくすとへかのあまくわね
がよのやんのすくふとてへくよくうき

五
國
法
律

前編に之を以ておもひておはなす花の白浪

卷之三

さうしてさうの如くあるをむづちのひはうれ

日者○方乃奇公與人言○其後患人所害

祝廷齋詩集

其間やうやくのうへて
そのうへて

まほのとせうく再現はともかくから沖浦

田文法師

之二
之三

おまかせのうわがまことのうへ

あはれ花道とひらかわのすみ

海仲正

まき（アヤハキ）の山花ハ、さうやううるうし
あらわげ、ゆふせ

うとうとおもひわけまゆふみほけま
待賢門院

待吳門後海河

白雲とみなの深江之門の月の
夜の風の音

山西門下兵衛

花の色とさすてうすの葉と、
あぐーひくみをすてあら
人辛人威もあ
小消防の花の下をみやせへるよまつまほの

人章人言

秦思抗懷
今不雅情

さとひやうのじゆくをそや人よ花のうるを
十そおへよよかせぬまゆのすと
ゆふけま
ゆふけま

千載和歌集卷第二

春下

多胡はよたりよけくと常やん花とくらば
をものとてよしとてけくふとよせん

あけ

白河院御製

まつむちゆきとくはとくはとくわく
くよだりよけくはくおはなわくせゆ
まくはくとくはくとくはくとくはく
はよけのあらあてはのとくはくはくはく
山花のとくはくはくはくはくはく

人吉前田政長



白雲とよよくてあをじよくのちよく有き
さきすのけくはくはくはくはくはく

春原季潤

き野山とよよくてあをじよくのちよく有き
夏は八年よかのわくわくはくはくはく
陽陰のよかす今はくはくはくはく

周内侍

山花わいじのよかすよかすよかすよかす
後朱雀殿のよかすよかすよかすよかす

乃ちまつて内のあるを自何以よとす
きのくすはるかよしすはる

大約言也

卷之三

と下花をまわすたびに風の音を耳のへてやうり

王長衡書云初
子雲傳

あらそくの花をひきよつてゐる
あそびまくら花のひとある

和參酒歌謡

花の守としのう

たぬきは良也

花道よりて之を以て用

وَالْمُؤْمِنُونَ

萬花の事とおもひき

卷之三

あうすれよめあそび
とくとくとくとく

在中猶言肉聲

はくをうかがふかひまわらわく

花の手本を
依る所

卷之三

一枝、春在手、不似東家風、也、人、看。

卷之三

卷之二

ああくちぢむをのけやれとすれぬ体ぢう

歐國法師

海仲隱

山極ちやうかひて、うきよせの人のまことわざ
花乃ちやうかひて、よみうきよ

西令法師

おまえのやうな
おまえのやうな

德國法師

花は向ふと心をもて候
花園へ入ら

卷之四

山風は山の花と山の木とある
山風は山の花と山の木とある

卷之三

花落家帰といふ心事ある
摩恋暮夜

卷之三

まへしむるのうの花の香り假想月
仮想月の花の香り假想月
假想月の花の香り假想月

卷之三

源仲正

おひやのひよのむかしをくほのひよのむかしをくほの
うそのまわげゆゑのすとある

日暮に於て此の事は
御心に於て是の事は

春風草木聞れ所

「河原の風景」
「河原の風景」

只すまゝひと和三郎の事に心を取られてゐる
わざうらの時とみゆきとある

中興之回憶

其後數日，公使使問之。公曰：「吾子之病，猶未已也。」

海國圖志

故人不以爲子也。子之不孝，無乃與已乎？

城門に臨むてはるゝ事ありて、山吹をもあつた。

前中和之進序

まよがねの門がねのいとくじよひすの花

春原基俊

山吹の花がねのいとくじよひすの花やといが
海河に臨むてはるゝ事ありて、山吹をもあつた
かうへりやうへりとてはるゝ事ありて、
また月乃けり

二年正月の御室の門は
九重の門とてはるゝ事ありて、かの門の御室

水を飲むたといひ、御室の門は

春原基俊

山吹の花がねのいとくじよひすの花やといが
春原宣政

山吹の花がねのいとくじよひすの花やといが
水を飲むたといひ、御室の門は

春原基俊

山吹の花がねのいとくじよひすの花やといが
水を飲むたといひ、御室の門は

春原基俊

山吹の花がねのいとくじよひすの花やといが
水を飲むたといひ、御室の門は

御門在工にのむすべ今 伊勢守藤花
をもる

唐寅

いふすくまよしわの花と友とゆきとて
承永の内裏今よ藤花と諱ちまう

中納言松也

九月の秋風にあひてすくとて
かくすくとてよひける時後傳

大炊御門在工

年々とかくぬきとてやかたのじはの風流
はくのへかくこくとくへ度とくのふく

紛れあひまく共にめ二刀とくとく

のきのきのすすみとてよしとよしとよ

経ある 一葉庵御前

風流のすくとてよしとよしとよしとよ

よしとよしとよしとよしとよしとよ

よしとよしとよしとよしとよしとよ

よしとよしとよしとよしとよしとよ

よしとよしとよしとよしとよしとよ

よしとよしとよしとよしとよしとよ

中務大臣のすこ

成子門塾主

かくはんのまへるにあらわすのせうのや
おもてすけむすめのまへるにあらわすのや

ある

大約之隨筆

三月西行の事

久我門食

八月西行の事

藤原宣成

八月西行の事

源仲孫

九月西行の事

藤原穀家

九月西行の事

琳良法師

九月西行の事

三月西行の事

法下尊興

九月西行の事

同三月西上とて
往く所を彷彿する

村人傍の花を

此處が花の所かあればうむねのうにかか
海浜三月西とひそむるをもあら

前人傍に見事

行がましにあたはれてうそよううめかす
萬河段間はるを可まはけのまのま

るをもあら 村中物語の

事あらじのまよを傍が今まふのまくね

村中亥門

よれわがのうりとあらわすやうひまきと
あると大よと

千載和歌集卷第三

麦守

海河既以時雨多而漁時更急のを
之に付也

家中御立直房

友永花の致しむるての如くとよもやむ

春原春候

今老子の隣の山並木を放々と見る有き
幸國既にるをすまひけり又のもの
ナリトアム

春原夏清和也

あ千鈴のわが守りの人やううどんともあも

和花をある

大京人又歌浦

レシムナツの雪の下の花半のま月のあらわ
春人和花とつらうとふとよみ付ける

石延人時立房

又附來やのくすり和花のすけりやもわら
和花のすとてよみ付ける

仁和人後述法號正三性

玉川もよきいの花を病のまへぬよとす
白河既多雨はよかすくけりふるのこ
とすくすく付ける和花をある

春原季子題歌

アーティスト個人的見解の如きは勿論、白川の筆
を村や花といふ言ふところ

文政改革

この先の前途が必ずあるのであるから白雪
和花もまたいふべきである

有應敷詮ねた

この先の前途が必ずあるのであるから白雪
和花もまたいふべきであるから白雪
和花もまたいふべきである

癡意妄道

穢と云ふのと云ふのと云ふのと云ふのと云ふ
あ川に附着するも云はばけつて度量をあら

痴心妄想

ま率て云ふ神の云ふ神の云ふ神の云ふ神の
云ふ神の云ふ神の云ふ神の云ふ神の云ふ
口人の云ふ神の云ふ神の云ふ神の云ふ
丁所も云ふ
或る川に附着するも云はばけつて度量をあら
に和すの云ふ神の云ふ神の云ふ神の云ふ
仰も云ふ

痴意妄道

おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと

此程人をひます今一歩まつておれをよ

めら

應度道

おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと
おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと

望がま保

おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと
おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと

通令法節

おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと
おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと

廉實道母

おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと
おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと

刑部檢察母

おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと
おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと

三國法師

おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと
おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと

和參法教母

おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと
おもてのまへにかえりまわるわくおおとおおとおおと

毛國部母

毛人御子

即ち天部云といふ者も之を仰げば
仁和寺法數和尚も是を
御教化とて之を傳へるに至るが如き

御教化とて之を傳へるに至るが如き

慈悲情懷如也

かくしては氣を取るゝの外には無事

徒に信教改

一念に成る事無く天部云といふ者も
在りて是を傳へるに至るが如き

モトノヨリ御教化とて之を傳へるに至るが如き

信政和尚也

此中より傳へる事無く天部云といふ者も

萬國部云といふ者も之を傳へるに至るが如き

天部云といふ者も之を傳へるに至るが如き

御教化とて之を傳へるに至るが如き

在人の間之更圓

かくしては氣を取るゝの外には無事

徒に信教改

タクセムシテの事は、うれやのじのち郭公就

前大衛門唐云也

アラマキモトガレハ一枚ノシの元をもとあつて

様政左衛門の時の今金十郎公の手とてよ

久之

タクセムシテの事は、うれやのじのち

右人ねえ肩すね工房多時十又二年す

せ作まつてある

通國法師

タクセムシテの事は、うれやのじのち

郭公就の事は、手とて二枚金く

郭公就の事は、手とて二枚金く

タクセムシテの事は、うれやのじのち

久我内大臣の事は、手とて極帝品庸とし

手とてある

本中納之雅頬

タクセムシテの事は、うれやのじのち

平庸の手とてよみ作まつてある

様政左衛門

タクセムシテの事は、うれやのじのち

内大臣

郭公就の事は、手とてよみ作まつてある

後朱雀院時を久事年四月一日内大臣

の年余と花板を。あら

松把歌室とふ言ひも節
さくわがまかのうのうへくよつねいはれども氣

歌へし

藤原基経

かづちと花板と袖へさへたよりとよれも

藤原基経

じきにかくすとお門と逃亡とよりとより

左人并歌意

ひよこの花板とふる歌、富士山とよりとより
唐板童だくづくよりとより

藤原基経

かくすと花板のうら歌、じよりとよりとより
うそすきとげる時花板のうらとよりとより
かけ

左人并歌意

ほくすと花板のうら歌、月とよりとよりとより

歌不入

近人並歌意

育高とよりとよりとよりとよりとよりとより
歌行院とよりとよりとよりとよりとよりとより
三のうてとよりとよりとよりとよりとよりとより

よしとよりとよりとよりとよりとよりとよりとより

源俊賴給

奉手おての事ことを候まつ。他人ひとの事ことを考かんべぬ月つきの元
中なか庭ばの入いり道みち太ひろに半はん持もす侍し。時とき
今いま侍しまつ。七月よなづの事こととてよある

彦原景仲給

七月よなづの事ことハやまとくにがくちよかくわひ
事ことをほほへる事ことすこまむけつすもあ

仄くず京きょう人ひとを愁うら情じやう

前奉公號隆

七月よなづの事ことを候まつ。考かんべぬ事ことを考かんべぬ

皇こう天てん承じゆ宣せん文ぶん後ご御ご

貴き西にしノの御ご事ことを候まつ。考かんべぬ事ことを考かんべぬ

彦原景仲給

七月よなづの事ことを候まつ。考かんべぬ事ことを考かんべぬ

侍し異こと口くち安やす藝い

七月よなづの事ことを候まつ。考かんべぬ事ことを考かんべぬ

彦原景仲給

七月よなづの事ことを候まつ。考かんべぬ事ことを考かんべぬ

旅泊月雨といふ事ある

源仲

青雨家は初めて月を泊めた日から
月在部といふ事ある

賀葉郎保

中野宿にて月を泊め立候

夜露使翁

月を泊め立候事より月を泊め立
月泊部といふ事ある

中納言師時

東坂の山部にて月を泊め立候事
後一重院の八傳と名松樹屋と申す所
もつかまつて月を泊め立候事
此を月を泊め立候事

律師度邊

月を泊め立候事より月を泊め立
勝西と人を加す月を泊め立候事
此を月を泊め立候事

源俊相承

月を泊め立候事より月を泊め立

源門院殿はまだ御年少の間中御部
とてまことに御行進

禁中御言綴集

さ月やニシテ山の御事に御出で御成
たる御跡をすすまざりけり御成を
ゆき侍け
禁中御言綴序

さくすもかうのトキの御事あらが
く御

時運と之歌

八月やかまゆる御事の御事御事
に申附え後事やわづ侍け事合
侍けよとすの事とすの事

春恩致厚詔

貴門院御事御事御事御事御事
とてまことに御行進

人意が宗

さくすもかうのトキの御事あらが
く御

源仲

さくすもかうのトキの御事あらが
く御

よみ人

雙魚堂

火事の事は、御心配いたしません。おまけに、おまえのやあ金子鹿の力もあらう。

おおきなまくらのうさぎ

卷之三

之子不以爲子也。故曰：「子不與母爭，母不與子爭。」

わざとまわらかに見せた。左の手は
ほおでておひでて、右の手はまくらをさす
水草の身といふのである。

法性是人道的工具

友よ之を以て其の御子の御事の如きをやせのうがとうとくに
あらす奇共に一格の心をもつておれけ

李清照
如夢令

藏文題跋

アラシのせよとれぬがゆく、おもてすすき
木下道満と云ふ者也。

中務少貞幸
と、このたゞかれて秋風をねのけよ。手書き

水をかくはちまう 仁和寺後入道法親と
去秋を後の三月に御手すりのあらわし
をみておまかせする水をのべてはけ

卷之三

卷之三

法不外庭

卷之三

卷之三

後漢書

志士仁人，願與之共濟者，固當不遺。而前人所遺，又復何似？

題照法師

さうしたがるが、お前は又の金舟を立てる
おまえの酒屋と、うらやましからう

法脫空經

支那實業之發展

卷之三

丁巳年夏月
花都王叔林仲

支乃半月おまかれてはあたからぬの事
西には月がとづく事ある

俊吉法師

又吉の御時やうな事あらうてよどての月
人言ふ事と改めたのあつて又月が秋とい
わうるるある

藤原教仲

小森原すとせうねえほの度や二方の月
草花をえ秋とりてはとすとすとすとす

弘明法師

又吉すとせのをとひがむにとひがむに
竹内秋邊とすとすとすとすとすとすとす

藤原教國

秋風すとせのをとひがむにとひがむにと
刑部で被惱す今やもとて御涼の空と
よみゆき

藤原教也

秋風すとせのをとひがむにとひがむにと
かくすとせのをとひがむにとひがむにと

藤原教也

秋風すとせのをとひがむにとひがむにと
かくすとせのをとひがむにとひがむにと

藤原教也

うそてうぢやひるの日をさうじゆふえま
ちう月をとむる

トアシタ

アラタニヒテナカサカタハシマス
私風うそ

千載和歌集卷第四

秋音上

あはれのよアハキ

侍臣のみ乃

秋音上
あはれのよアハキ
秋音上
侍臣のみ乃
仁義事ニシ法既上
ほ弟生ハ無事アリ
おまかねとやくわく
うそてすまふうすま
うそてすまふうすま

侍異門に流河

秋音上
あはれのよアハキ

白雲を私と人を像ゆ

八重の花は秋の匂いをもつておひるまですとく

うみの匂ひとよもや

麻が葉跡

秋の匂ひとよもや和風の香とよもや
千の匂ひとよもやあわすと秋風吹ふらふらす
かほりとよもやあわすとよもや

賀昌宣政

秋の匂ひ風にはよひまばりすとよもや

郁翁門院の前我今と秋風とよもや

大おづれ家

よしとく秋風はよひまばりすとよもや
かほりの秋の匂ひとよもや

源俊種ねむ

秋の匂ひ風はよひまばりすとよもや
すとよもやあわせ

松政前左衛門

秋の匂ひ風はよひまばりすとよもや
よもやあわせすとよもや

大納言院季

まのあまで重く背負ひや おもてはなに
藤河邊にむるをすすむとみは
まう 二壁をよぶが言院後

まの天の衣原とわねをやめしま

前舟宮内

源氏極和院

まの天乃からひとむかひにわいよ
まきらすのゆ一せうのひをよみせ経ま

紫園院御歌

まよおれぬをふるひのへきまくら
まのはねのゆよみけよ

左津門左大臣

天の川よりすすみ神こうねりあふるりや
藤河邊にむるをすすむとみはなには
みけよ

大納言師頼

秋共六四へそくのやうをもや人の心ひよし
景 と 近冬とおゆまきの甲斐
まうと草むのうをかねやまくと野のうや

雲かすの隣西上人席にすすめ侍まう

時より

庵庵道院

あゆつてすが絶えやむくとくよしや節らの
事や

草花春秋とソラ風をも

法や舞覽

おまかとみれきりの間のあすとすすみ
豊一と そひへ
いあたじいなまかよ秋風下をもじのひるわ

和み哉

人間アセキモト義をもてやうのひのく

庵庵侍

秋のすくはしのよ下の秋のすくは

庵庵とぞ

充物野の義をもとめまくはるすのひのく

セキ法師

かよむちよからむしむかよくすくはるす
萬門院はまよまよのひのくげくよみけまく

大御真師頃

萬門院のひのくが一枝もし神をわらと
法性す人道をもてのひのくとめずとめず

未中猶言耶至

帝中猶言耶至

高麗國事
高麗國事
高麗國事
高麗國事

青花のうすすきやくわくのうすすき
影一川
藤原行家

卷之三

卷之三

雪風に極手で大根八百味をまわす花の枝工
様改めて左角も右角も何處か引もく野仕秋
夕と之と並んで 産尼國方ねじ

源復初行

おまかせする。宮城の花の多くは、
野花並みとしか見えぬ。
秋の前と後と様子が全然
ちがう。秋のすこやかな
さを思ひ出す。

節はまの（）の時、心もすことすむ
皇太子宮文庫

又大野の秋月を題して
歌ふ。草庵

ほどのくらのうかうかやかこせの秋のやうに
あつるをあよせ仿けます草花のことを

まう仿け

秋の氣氣

す風のうきがひあつて人間の野の秋風
野花あとソラモト花をまう仿け

にわすニアホ

秋の野のうきがひあつて人間の野の秋風
野花あとソラモト花をまう仿け

にわすニアホ

草木も秋の氣氣のことをやめるとじよをも
まはははるをあさるをも

秋の氣氣

じよをも秋の氣氣のことをやめるとじよをも
草木も秋の氣氣のことをやめるとじよをも

にわすニアホ

じよをも秋の氣氣のことをやめるとじよをも
草木も秋の氣氣のことをやめるとじよをも

にわすニアホ

じよをも秋の氣氣のことをやめるとじよをも
草木も秋の氣氣のことをやめるとじよをも

にわすニアホ

秋の氣氣

にわすニアホ

秋乃可とてよみにけり

秋乃可とてよみにけり

秋乃可とてよみにけり

秋乃可とてよみにけり

小牛

秋乃可とてよみにけり

春風便り

秋乃可とてよみにけり

春風便り

秋乃可とてよみにけり

春風便り

秋乃可とてよみにけり

春風便り

秋乃可とてよみにけり

秋乃可とてよみにけり

清華園中正殿

源氏物語の研究

本物の言葉をうながす
風景の如き

やうと肩ひたつなるがまをうながすの山
務政事務局の事工司事務局を彷彿
時の事とぞある

隆隱法師

かねまく日下と、うそよみかねてましのアーチの元
月すとてみ彷徨

前中郎云雅頤

と金を取らへて其の内にかへるをめでたまへ
曾も人所言ひえ後は才子すまほも
時よりそつうに仕事じゆく月乃す
本のたういまさら空
月をはるにやまとしるのむらのじよまくま
行中物を緩慢うるわしくてゆき月とぞく
をもみほげま
源氏物語

あらむじ野の風に吹きてる月が見
うす可せり 一月奇とくとくとくとくとくとく

空は霞に暮れ

風は秋の月を吹きましと秋の月

大根門左兵

小美玉てやのまねは月がよかくまほ
風は衣冠と又後所
そりのむすすは月がまう月がま

春原は浦ね

桂葉は吹きましと秋の月

法華ま人間も改めは侍まつ月を秋
反とひらさんとゆきせ侍けりまづ

波依頬ね

只くまゆてやのややわらかせ秋の月

鶴不翁

春原は浦

山のよまゆてやのややわらかせ秋の月

春原は浦

秋のやうてやのややわらかせ秋の月

法華ま人間も改めは侍まつ月の侍よせ

侍よせ 人事と改めよせ

をひるめられぬに因はだらかとて御浦流

うきよえに仕けはまにすとて候侍を

太衛門頼実

アラシガタニマササギの内にしたがつたの外
アラシガタニマササギの内にしたがつたの外

佐吉法師

さあやうのにてかむけのけよする日を
アラシガタニマササギの内にしたがつたの外
ひきよせし後番守金とて社主事伴ひを
ひきよせし後番守金とて社主事伴ひを

佐吉法師

アラシガタニマササギの内にしたがつたの外

病院なむね

アラシガタニマササギの内にしたがつたの外

明と月とソハシテアラシガタニマササギ

アラシガタニマササギの内にしたがつたの外

月と月とソハシテアラシガタニマササギの内にしたがつたの外

頼田法師

アラシガタニマササギの内にしたがつたの外

月と月とソハシテアラシガタニマササギの内にしたがつたの外

參照號國

酒井原と申すは山の底に有る者にて此の月

是不^レ

泰原は捕ね

かまくわ十日も秋あらわすが十月、又十一月

刑部は捕

方の秋は秋正月の事、春の事、夏の事

是或

今了の秋はかくは正月よりをもととす

本入助云其處

たゞかくは正月より秋の事、春の事、夏の事

法ねず入西から上段工事のあらず同居

月と云ふてを之稱す

源俊相承

此月のいづれの事と云ふて此の月

名川舟

千載和歌集卷第亜

秋寄下

題不示

大式三位

ちうもとすすきのいの秋のねみのまくらをか
か川に歸るを可まくまつてある

藤原仲実

山里ばけりむとむかひの秋ゆくわのひよみを
まほほるてすまじけりの秋の寄り

藤原季雅

秋の未いづきくはぬ風ふくよきすまのなきとて
法性す人送れを改て内とすよ侍のく時の
象のすみよ野風とくよきとくよき

藤原時昌

露かしすれりと秋の野すりとあるのなか
承暦二年内裏すみよもあ

藤原正安

冬か小野、夜思かすすみよもあらむれぢを
源河に歸るを可まじけり時とも

二条宣宗

えどもかのまよのまよす度のまよすや

大而玄之莫

子曰：「君子不重，則無以立。」
子曰：「君子食無求飽，居無求安，不
執事，不求富。」

卷之三

情仁說

秋の風が吹くとさすがに寒い
日が来る。鹿の鳴き声で夜が静かだ

卷之三

藏書
中華書局影印

待異日復題

本治療と心の問題があつた

刑之元之

漆川のまほの原とやうの生田の村の跡の處
藤原隆信承

うまかずら、かくはんか、ひのきの山のまぐら

俊之法師

通國法師

漆川本年二月一ノ日度のち入(せ)れやう
度をすあらとづらさんをよみ

送法師

玄伊野の山林を移す鹿の事
鹿すとてある 天京人又猶毛
即の事す、うしの毛が付すとてある
在するまよ地

さくらの山林を移す鹿の事すとてある

法師急田

山のあすの鹿の事すの事すとてある

俊志法師

山のあすの鹿の事すとてある

送法師

冬の秋の事すとてある 天京人又とてある
天京人又とてある

俊志法師

山のあすの鹿の事すとてある

惟家度言

送法師

山のあすの鹿の事すとてある

俊志法師

山のあすの鹿の事すとてある

見不れ

とみへり

たゞかくまつりあひてかのうへんのうめいにあらわし

源氏物語

ノ門を出でておきへしのびゆるよきがれをもる

東宮法師

おのほ葉をすくめて秋の風の匂ふ有

藤原佐理

秋の葉をすくめて秋の匂ふ有
ちやね一とくらむをすくめつけ

大庭中納言

さくの葉をすくめて秋の匂ふ有
すくせむけ時よりけ

入林門左衛門

葉をすくめよむれの匂ふ有
さくへとむけをよせによみ

在山院御

秋の葉をすくめよむれの匂ふ有
保延のふるはるをよみすくめつけ

おのほ葉をすくめよみすくめつけ

おもての葉をすくめよみすくめつけ

卷之三

通志法苑

たのゆき稀よりてかわく野のあら月のけふ

卷之二

草木年々新色を變へり而して之を以て
後なる間以て九月たゞ十月までは行かず

人富貴也者，則已矣。

ナニタの心をよみ

漢人

卷之三

月前機会と之のんを
集め、以て

小糸定てモヤのまゝにひるゝ用事へやうへ
海河に附けまつたはゆるのとま

卷之三

ムニシテモアリス。トキノハタケノミツカニシテ、
アリス。トキノハタケノミツカニシテ、
アリス。

卷之三

那時我還在大學讀書，跟著一個同學去逛書店，他說：「你
看這本《金瓶梅》怎麼樣？」

私有権と之をもつてゐる

俊國法師

えのまきやまくわわる墨をくね草よくと
吉のあととす

法橋宗因

又雪や秋のわくとあつて入袖う、あひとす
養の草花といふはくわくをにやすけ

宗ほ院脚駒

かみだれの草よかのうらうされ
きくあゆのくわく

本多御親隆

まつてみかもてぬくよとくのいふくらうて
法はまくとおとせんじて門と戸と つけ
時もの千人一物をとめ

藤原とぞ

とわせばうる霜をよまとおとすくわくの
月廻草花といふとくをとむけ

口火

白菊のまよくあつていは花とくよく廻草
箭首が雪とくちこくをとむけ

本大信に約す

國法の爲めに國法を守る事は國の爲めに國を守る事

國法守りてある 村國法師

わが國の國の爲めに國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

國法守る事

かくからず國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

國法守る事は國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

ある 國法守る事

まくは國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

國法守る事は國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

國法守る事

まくは國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

國法守る事は國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

國法守る事

まくは國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

國法守る事

まくは國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

國法守る事

秋の守りてある 國法守る事

は國の爲めに國を守る事は國の爲めに國を守る事

既

西行法師

おがくきの御事やくわすとくの御事と御事ハ
おほきの御事とくわすとくの御事と御事ハ

おほきの御事とくわすとくの御事と御事ハ

小弁

おがくきの御事やくわすとくの御事と御事ハ
おがくきの御事やくわすとくの御事と御事ハ

玄性法師

おがくきの御事やくわすとくの御事と御事ハ
おがくきの御事やくわすとくの御事と御事ハ

大京入定弘博

おがくきの御事やくわすとくの御事と御事ハ

月照院とくわすとくの御事と御事ハ

院清圓とくわすとくの御事と御事ハ

月照院とくわすとくの御事と御事ハ

圓滿院とくわすとくの御事と御事ハ

月照院とくわすとくの御事と御事ハ

入定弘博

手の筋の山川が歌を歌ひて居る所

通金法師

舟川あつて夜の音をうるさくはのせいか

るを可中へ難事をよむ

藤原信博

今まゆめかみそくねどうすみすみ有

底まひぐきとも

藤原仲

おどりのアのとくわのアはおまき

豊原仲

吹きうちうきをひとひと風か等に

ねらひとくらへとくらへ

藤原仲

もくわびのまのまへてからひやうすみあは

たつあまとくらへんを

佐家廣吉

たのとくのまくじてからひやうすみあは

たいへん

法橋慈年

あらものまくじてからひやうすみあは

法河慈門もあらもあらもあらもあらも

源かよのね

秋の日はあはれあるやうに思ふとまことに思ひが
あきすすむせぬまではまのすすとて

うけ 信政本名工兵

あきすすむのとて今年のとやみの時雨あま
あまほあとどろくさんをうみけま

後三室内侍

までか秋まへゆかうすあまうれむにいざる
まくすすりまう時九月盡のじよとくまを

うけ

まほ後津御

かねこのちかのまづかれ秋と風のじよとく
まよよ秋といふふくわくうみけま

前人傳をえま

まよよ秋といふふくわくうみけまをはぐく
まよよのたぬきの後事よす今一うけま
お九月盡のじよとくま

晴西人

かずまわふくわくうみけまをはぐく

源氏物語

めやまで秋風ふきと風てまのまよがくさ
承暦二年八月三十日記

本中納言道序

立高ひうちておちたまをかくわが秋はすとよりて風も
そよそよ吹きゆげつ月夜のくさとよも
夜を全てあはれ遊
今年かう秋ハムシタモトコノ御代をまくす
そくう手札

千載和歌集卷第六

冬守

雪河度ぬ時るそよごひやけつ時初冬のふき

しのづけ

人間言ふ實

手のう秋ハミテハレのちよ志弓の水のすこしこ

源すくよのねに

いそむ秋のあらうあす今わ半年の心身すまひ

春度仲夏ねに

み川水のくすのゆくまことそほのこりをひき合ひ
そそめあへけつ時初冬の人もとよせねまう

朱毛院御歌

おはなむくらむねをいはれて夜のよみゆき

大歓声門左衛門

おはなむくらむねをいはれて夜のよみゆき

大歓声門左衛門

おはなむくらむねをいはれて夜のよみゆき

大歓声門左衛門

おはなむくらむねをいはれて夜のよみゆき

花園門左衛門小人遣

おはなむくらむねをいはれて夜のよみゆき

泰應奉吉

おはなむくらむねをいはれて夜のよみゆき

題一
わふまみ

おはなむくらむねをいはれて夜のよみゆき

大歓声門左衛門

おはなむくらむねをいはれて夜のよみゆき

大歓声門左衛門

泰應奉吉

すがりてとせぬのまへやあすけて霜やまくじ

藤原基俊

秋生よきのあ葉よし霜のうすをいはかや文
そらもくのすとすも

藤原宣家

えきてひとよすとせよかの霜のふせりかで

歸不ふ

藤原宣家

霜さして松竹のきくわゆのひよは雨ふるも

馬内侍

すきて沙かくせびのすみよがくわのすみ

法は寺入遣本を改て内と戻し侍多時

家のすみと時雨をすみ

源宣信 信定道家

まよひがきやどす西れなの枝の木のねまを

生むにそよぐすすめ底のすと

すと

金子源宣人之後所

ほりよかなの枝の木のねまをすめ雨やまのす

時のすとく淡け

に春後入遣本を

そぞらすとくやまくすとく時雨のひよくす

新更町西ノ山ノ原ノ木行け

橋政左右太夫

山中村の事也よがすく内とす有る此月

癡鹿陰信和也

したかはまちよがすく内とす有る此月

馬田の子とすき 徒三佐勅政

山中村の事也よがすく内とす有る此月

源師充

山中村の事也よがすく内とす有る此月

西園吉郎

山中村の事也よがすく内とす有る此月

中村吉信

山中村の事也よがすく内とす有る此月

源俊賴也

山中村の事也よがすく内とす有る此月

一陣太白と新宮院

もとて今にかひすい生れんすすてます
内侍法師人へすきすすてます

山中村の事也よがすく内とす有る此月

痴鹿陰信和也

中野の事はおもむろに思ひたる事無く

讀人へ

中野の事はおもむろに思ひたる事無く

山と田と川と山と川と山と

源仲頬

中野の事はおもむろに思ひたる事無く

隆原法師

はやうにあがめとて、お城の下の能のあらわして
源俊頼船に
又おまかせて、おちのねもと廢すわせられ
傳人御の間様の千人十人をよみ
そよぎたまひに、おれがおけわるやうに
千人をもつて、おとて廢すと復興
ひての支方の元を守るがおとてかぢ
おとてかぢの上をよむるがおとてかぢ
延命法師

法下持是

延年寺保

痛れの罪は、おとての心を深くおちる
火もとある、源俊船
おとての心を守るがおとての心を守る
豈不然
是もおとての心を守るがおとての心を守る
おとての心を守るがおとての心を守る

延年寺保

木の下の床の上枕から下へおもむかれる
事多可れけり時よりせんじゆくは

空居院御起

おひるおまきの御事あわせたる御事の事
たまらぬ心懃

御門へ入る事あらうと御事の事
か初隊と云ふ事ある

花中御言御事

おまきの御事あらうと御事の事
木の下の上枕

國吉郎

門の外へ出る事八宿までおまきの事

空居院

おまきの御事あらうと御事の事
月が大きと云ふ事ある

本丸御居院

木の下の床の上枕へ出る事八宿までおまきの事
冬月と云ふ事ある

平家重

木の下の床の上枕へ出る事八宿までおまきの事

あつてある たとえ
やがてはまくらゆるのよも

そんじてはまくらゆるのよも
春原山のね

そんじてはまくらゆるのよも
水

隨園詩節

月をしるはまくらゆるのよも
さきすけはまくらゆるのよも

まほに津見

ほくゆまくらゆるのよも
はまくらゆるのよも

隨園詩節

月をしるはまくらゆるのよも
因み因みとまくらゆるのよも

隨園詩節

まくらゆるのよも
まくらゆるのよも

隨園詩節

まくらゆるのよも
まくらゆるのよも

隨園詩節

まくらゆるのよも
まくらゆるのよも

隨園詩節

藤原秀圓

かえりよよのまきやうじのまわすとすふるれ
藤原秀圓

藤原秀圓

消えゆく人をむしりてかくすすみの雪
雪すとすもあ

藤原秀圓

霜の朝の古風はまことに花と有る
に春後入はばれ
たゞてよしの月夜はまかげて一木の白雪
年々聞松

京極本多政貞の丁寧の手合にて

とておもひ

流れる廻

藤原秀圓

かよまとのかよあよそきのまよす海

藤原秀圓

障子の外にこれに構うてのむらうま
いのまつらうすすすまうらのすのす
とて壁をぬぐま 二階建物

雪すとすもあよそきのまよす海

也既得之而復失之者多矣
不計其法執事年光

流年行持亦復何足道哉

予の可と不可を傳へ

其の事は勿論

此の事は勿論

此の事は勿論

從之位相政

志之相之勿論

列祖法師

流年行持亦復何足道哉
不計其法執事年光
時序の守護である

參照良書

也亦其の事は勿論
此の事は勿論

法人ノ人

陰陽五行の事は勿論
此の事は勿論

西行法師

「おまえが何を知るべくあれども、やあさうだ」

題不怠

秀乃手とて
原度の秀

卷之三

中華人民共和國郵政部印

其後有事於漢者，皆爲所敗。及武帝時，大將軍霍去病擊匈奴，亦常與之俱。

内
の
れ
か
い
ま
じ
ゆ
き

はるかに、わがままである。それで、おれ
年少の頃から、おもてのうへんを

卷之三

正月の朝、天皇は御内帑金を御内帑庫に貯め置く。御内帑庫は御内帑金の貯蔵庫である。

卷之三

卷之三

Signatur auf dem Vorderdeckel

平井さち乃ちんとある

さうす

あそびのまわらわのせうじにいはむとくまつ

かくのめいのじんをとる

ねじまく

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

平のまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまく

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

もつこゑひづけ

ねじまく

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

ねじまくのまわらわのせうじにいはむとくまつ

千載和歌集卷第7

離別哥

仕使の歸りけふとぞうひきう

養恩重あれに

じうすむるをまきそはくをくわうの松原
有因人をよみてすむけゆめうひきう

旅人の言ひう

かねむすみてやう令りまますとくとしと見そ
きふよきつれだけ人のまてすとゆう
まことに九月にくへたのうすわざれうひきう

そよぐ

まきう

かまよるまよのひかみすと秋のやくやうかく
せ河尾川時るをすすむわけゆめ引立と
くわうひきう

大納言

くわうひきうがとくわあははがのとあらはよせよ

大納言

御風をうきうかくうをまわせはのくはうのう

涼後御ねに

かまよるかくうかくうと日野へすのまうひきう
晚御うかくうかくうとひきうかくう

アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ

大富久松捕

アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ

上門尾大創

アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ

慈忍院御

アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ
アラハの御心事は人間には解らぬ

人奉入貢資用

さうしておまけにかくは、おまかせたてのまへ
はくよまつておまかせたて、おまかせたてと
てのまかせたてのまへおまかせたてと
おまかせたておまかせたてと

おまかせたて

おまかせたておまかせたておまかせたて
おまかせたておまかせたておまかせたて
おまかせたておまかせたておまかせたて

おまかせたて

おまかせたておまかせたておまかせたて

おまかせたて

おまかせたておまかせたておまかせたて
おまかせたておまかせたておまかせたて
おまかせたておまかせたておまかせたて

おまかせたて

おまかせたておまかせたておまかせたて
おまかせたておまかせたておまかせたて
おまかせたておまかせたておまかせたて

おまかせたて

伊とおのの秋とむかへるはまくらす
源雅國年こうひよと草のとよをす
（行）まくらと休因とまくらけはそとす
まくらはまくらまくらまくらはまくら
の寝曲のとよとよとよとよとよとよとよ
うのよの唐、まくらたまくらたまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

人静一 ほのかよみわかな
石徹の香頃

ひよのよの秋とおのの秋とむかへるはまくら

（行）まくらと休因とまくらけはそとす

（行）まくらと休因とまくらけはそとす

春原定

（行）まくら

千載私歌集卷第八

羈旅

景

暮鹿危水社

晨明月は清水トヤムシテ今半ハニシテモ波の音
は暫ま入透本の音ナリタガシヨシミ内土石
小侍もすま月と云ふ事と云ひ侍も

中納言節假

るよましやはテのまほの波ノカタシテやまリ
月前病痛と云ふ事と云ひ

暮鹿危水社

あさる行をみよ秋れぬてよく見ゆる月
遙河尾川時るそすキサマムキツ月の可
ども中納言國信
泥ろとす有能月をくすや波の音をよく聞
絶海初雪とづく波音と云ひ侍も

八條春吉政之氏

よちくの岸の岸風さうさうあれやの中山
あつてよめのうあつてよめの侍も
わふわふ

水のうよじよかうてよじよかうてよかうてよかうてよ

丹後國トヨタケヤシモツモニシテ

赤浪衛門

アキラムシヤシモツモニシテハ
はの國トヨタケシモニシテハ
アリテハシモツモニシテハシモツモニシテ

赤浪衛門

アキラムシヤシモツモニシテハ
ナシモツモニシテハシモツモニシテ
ナシモツモニシテハシモツモニシテ

赤浪衛門

アキラムシヤシモツモニシテハ
天に元年ナシモツモニシテハ
アキラムシヤシモツモニシテ

赤浪衛門

アキラムシヤシモツモニシテハ
法螺ナシモツモニシテハシモツモニシテ

赤浪衛門

アキラムシヤシモツモニシテハ
小糸ナシモツモニシテハシモツモニシテ

赤浪衛門

アキラムシヤシモツモニシテハ
字は既付

アキラムシヤシモツモニシテ

松のむと山のあらじゆのよどきのくわい

人吹所門を入る

花萼野(カエラノ)霜れわれそぞくは風ひ野

春風を通ねば

更故やまとひの刀もとまつてみよとすくいし

待長門後海河

さよひかくよるあやめのじよまつく見ね

おもすほのすす

蘆のそよぎはなづけふよる風の草まよが

さよひ山風と霞

浦アシホの波の荒れせざるいね流のさよが
せるうじかくね吹び一例もつてあはれと

日をとどめし 日向法師

アの原くわくはきアサヒあよび日をとどめ
す節よすてひげつめうてよひき

す節法數と是法

はよかうじやのすとせわがふじの風のくわく

下野國のまづらうにまたるの國の風とす

よしよし侍けく 箕中野吉仲

木の風ひの風のくわくひよひとくね風のくわく

あつまのまじまとひもはやくせんせん

大河傳承とよき

たまえま翁丸

日を打てゆくとまわるをかどまるかとながく
海をすみとくらうとくに傳け

よみへり

くわくわくわくわくわくわくわくわく
たのの圓こまくわくわくわくわくわく
こ人のよとくわくわくわくわくわく

いじて傳承いつりけ

道因法師

月を打てゆくとまわるをかどまるかとながく
海をすみとくらうとくに傳け

龍溪仲仲

ま波のまよへとちむとまらのまよへとよませ
中ほなたのまよとおほひまほとくらん
をくまうけ

人跡をく

却てゆくやくま波のまのま水のまくまく
おれのまとくらんとくらんとくらん
をくまうけ

人跡をく

詔されまくらの空けをかかへてのすりや
行かねひす今とて人へはなれまうす
詔宿付内といふとてあはげ
不と人情更事

アラシカニシマサナリ松のむすめ時内あ
伎と法師

ムツヘルタケル御内はまくらの和紙ハ内

人を失ふ宮小侍從

草花お詔の御内はまくらの内がまくら

源仲良

ナシモレバヤシナリ御内様おの御内をかね
おとづれ可よせあもる時様可とてを
あもる

権政前左大臣

アラシトヨタケの木と傳ひまわの内風をうるさ
刑部ノ類情

アラシトヨタケの木と傳ひまわの内風をうるさ
あもる節清の木と傳ひまわの内風をうるさ
あもる節清の木と傳ひまわの内風をうるさ

詔宿のいんとあもる

仁宗二年は秋至ま

うまく行ひてはまよ脇わきねをしめせとてやれわ祝のぶ
脇わきの手てとてよみけもる

法事下毛用

脇わきの手てとてよみけもる
脇わきの手てとてよみけもる
車くるまを脇わきねのまへとてよみけもる
車くるまを脇わきねのまへとてよみけもる
冥めいめ死し月つきとてよみけもる

法服面おもて

ふすま有あの此この月つきのひひがのやうようとてよみけもる
ふすま有あの此この月つきのひひがのやうようとてよみけもる
脇わきの手てとてよみけもる

奉むさ度たを附つす

脇わきの手てとてよみけもる
脇わきの手てとてよみけもる
脇わきの手てとてよみけもる
脇わきの手てとてよみけもる
脇わきの手てとてよみけもる

田たまほ師

かづてあまとよきまほのまへとて車くるまを死し
脇わきの手てとてよみけもる

行ゆ儀ぎ而とそ年と

脇わきの手てとてよみけもる
脇わきの手てとてよみけもる
脇わきの手てとてよみけもる
脇わきの手てとてよみけもる

よみ

藤原資惠

旅のまちをすくお時田舎あそび天神のねがれ

旅のすとてめら 人申た歌す

あかう不破のまや旅おとおとえにかわる
ひのまちあひてこな國よ行きう時

よみ

平康頼

ひそひそうさうのうとむれてたひくひれい
さすまほの小説はあひとやよしよハテの風
鶴中扇まことづらうふるす

信ひよトは

東海とくとくやかくねんすすまく白いのま
田舎ほ歸るをけぬまうまくのまのま
旅のすとてめら

寛尊法師

旅のまちの相思花のかくすまうてま
よみの元

千載私稿集卷第十九

哀傷序

花のすらよ春原の頼るどもひいてひそ
よまされやまきうち中ほ定方ねにるどまく
とけくよきし後のひじてうとうとけく
ときももくそどくやねよめ頼む
まろきく年の花をアテ大物とは
許よつうけ、中務・奥平のよ、
まれどもくすれをよみあくわづのくさり
セイ 前人跡云々は

紹人アキシやあくせどもアキ人とのよわいなハ
やうすみの極をみてよしのけ
春原た水ねた

人きう人のれどとくわよと宿の極を御行門
ほじゆみのよのよこくれでよも
和氣の或ひ
行されれアキシよれよけよぢくとくわよ
わよへけよくよいよくよくよくよくよく
アノ有きよじゆよまねよまくよのよく
かうりけう 楊原通信承

15
アラカルモリハセシタリ

中野さんちの新居が出来たばかりで
めての駒とあら
高尾和也

也。此之謂也。故曰。知者不惑。仁者不憂。勇者不懼。

花山隱士

源流

通命法師

花山院かくわをじゆうてのせんとひき

まくの今のかみをもとへておひわざやれ
後一章はかくもいたまつての御の心
あふとほと流すと車門だ

一、あらわすまかし部のことをいたすと
祇園のことをひきだすのをもよおす
うてひそむうわくはくもがく
絶てほ陽の門に一ぶけ缺きとばひよ
みくわなよてひそむうわくはく

昌蒲くわくよどのかい

てほよひま

弁のゆゑ

あわせたまのあわせたまでもあわせねねたま

せ

江佐

玉ねぎわわせ草八有りのくわくよどやひ
人御えせふ人御えにのひじあよすと
まくをせまくよまくはくはくすよくゆく
ひまくつりけん 人御え位

ひまくつりけん 人御え位

せ

人御え位

卯みちよまくせよみよまくせよみよまくせ

一絆

絆

お香風の女

ひまくつりけん

大正五年五月五日をもよおせんわ人よアセモ
後一月後六月五日をもよおせん年

小中宮又ノハラ給下申す四月廿九日
おもて山門院にて候まじ口人アガ

ミタニ候侍まつ 小井の令姫

御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候
大吉一年六月御役大嘗會カミイハツアリ。又
十二月御内大臣ウチノタケルアリモニ候也の事
内歎ウチノタケルアリ時より侍まつ候侍まつ

侍まつ

小中宮宣旨

御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候

侍まつ

大嘗會カミイハツアリ

御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候
と御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候
大吉一年六月御役大嘗會カミイハツアリモニ候也の事
内歎ウチノタケルアリ時より侍まつ候侍まつ

侍まつ

御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候

御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候
恒徳カウドクアリ侍まつ候侍まつの事
の御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候

御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候

御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候
上車ウチヅアリモの御サハハルの如也わざ候

侍まつ

御事アシタツアリモの御サハハルの如也わざ候

おと木のうすもよめきあわせよ

みどりかけ 未陸門

つねよえわざひ秋風じとけてからく風

月夜

と車門に

うてよせとれどもやがすその夜をさす野
あひよ侍もわざひ京もすがまわぬとき
ていよすの下アはくも送ともよも

海東春和

おとよすよそかす八紗八八さわれをもす
ゑ人よ侍まよたやのよひよちよよまく

のよとよとよの野よ花よゆよまと

アリキム 平雅康

とよよよよのよそとアリのよそとよそよそ
石御門侍奉よなれ侍よにはのよよよ

本中初進序

おとよ人よとよらよとよわよとよよよよとよ
後よ多侍よそれよとよよよよよよよよよよ

侍け

義忠郎限和

おとよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
お侍よ侍よよよよよよよよよよよよよよよよよ

後中御立因信中ねづけまつ時前事
スルにて侍まつてとつさりけ

行甲御立役者

正月の秋子の手をもあやしめまつ

中

中御立因信

あや草うるを下すのを御立さうせ
サシケテうきよ侍立に肥はみどり
アシケテ侍立にうりけ

恭原とく

正月の秋子の手をもあやしめまつ

賀宣辰言ひよれ侍は後醍の翁うどん
主と侍まつよまけをれ侍まつ
おまつとおまつとおまつとおまつとおまつ
おまつとおまつとおまつとおまつとおまつ
よめ
恭原有信船内

主とおまつとおまつとおまつとおまつ
人のたけ事師とて御酒文とて侍ま
うすの侍はれがまつ侍け

慶元法師

正月の秋子の手をもあやしめまつ

侍賀門院、之を後へて後の方
へと、之を終へる日をもせにあけ

寺法院御記

寺法院、人をやうがくはんとあるれ
はり

西門院兵衛

かとよかとはのまきとくとくわざれ

かひじきをたての下すよくくわら

かの後からうる人のとくにけれ

拝巖法師

此がまことやがくの跡をねわざとく

服よひみすふと人のまきとくとくわざの
けよきよこしてとくとくわざのまきとくとくわ
ざとよく

天台院主膳丸

寺法院のまきよねをわざわざとくとくわざとくとくわ

よてとせ続まつむきわざとくとくわざとくとくわ

のつけとせとせとくとくわざとくとくわざとくとくわ

寺法院御記

寺法院のまきよねをわざわざとくとくわざとくとくわ
ざとくとくわざとくとくわざとくとくわざとくとくわ
ざとくとくわざとくとくわざとくとくわざとくとくわ

おもよしくはておひまつりのねのあくあま
中納言伊東大年があとておまわすと
後のやうとく九月のよしむけきはね

よおはけき

大宮前を政府

たとくにこまでしておもむかくへんぐらひ

大納言玄公これ侍後のことをのほほ

侍け

花園院太室

父すひつひるよほよちかがのよすすみ
人砍門左衛門これ侍ね七月七日母
の三危のもとさせうくのにゆきつりき

権大納言玄公

玄公大納言權聖也とあるまじる
と侍右大臣

さあこのてまよ納へせよひのまよあくせやえ
待賀門はくわせたまよて後法令則びよ
て附子らきよに和まほ法令則主は
立よまよおせやえよめ加とじよくこくよ
二度ほれを経みて門のまよて侍

侍け

法令則置

つねよまよめよどくわくよくよくよくよく

大歎聞に人食方主は後生を
て仕事ねどもの仕事をして候侍ま
るのやういふと見

うきくのとおもひをうかがひ
母の三位がまもて後廣侍は

田印の侍

きくまじゆへやうだりてうきくのとおもひをうかがひ
母の服上仕事わく又に伊ニ活ガまつ
よきく時清侍も 森慶貞昌侍
乍らあくまでえせな八百萬石を守る

三のにてよかげん力主はよけつけよ
まき

左京人又義徳

えせたよかげんのとおもひをうかがひ
後入達は飲玉から侍のうきくのとおもひ
さきアラ清侍も 信教下性

へやうあねわざのとおもひをうかがひのとおも
ひのとおもひをうかがひて侍のうきくのとおもひ
のとおもひをうかがひて侍のうきくのとおもひ

左京人又義徳

野(アレハシ)サセヤ源(スルヘ)ぬ共(ノ)下(ミ)

まことに傳説あつたハの、いづれもかき
て仕合ひあつた 信頼乾吉

うふまのよきめりは、川と河と湖と
花園左右のあつたハ、仕合ひをす
くさく仕合ひをすかくも、年一で後
のうかよひくや。——仕合ひをやくよへ

下仕合

只今やは、うきと縫のうて、あがむをと
て、すま仕合ひをす母子つかまえまを歎
手足ちまくさくのひくも、じゆて、後毎

おまつよけをよみ

舞ゆは師

さかく、うきをうきと縫のうて、すまを
周防の國よしめくよけが、かのうて
おまつよけとかて、うかくよけ
舞ゆは師 慶應義國

うくとくといひ、うきと縫のうて、すまを
仁喜すは様よき花にほして、かく仕
みまう後月忌の日、の暮れよまかくまく
山に立てて、うかくよけをひよみ

先達法師

山の寺に住むてはくまやや生むるかくらの山の
中御法師をもつたる事正の上草の事より傳來
よまざりしゆる

法服也直

年老いてはくまをもつたる事正の事より傳來
ゆる

ゆくはくとゆくはく

圓滿法師

まくはくをもつてはくまをもつてからよからぬ令下るをせ
因縁の人西行秋こひつてよとあそ
よまざりして伝承するをも

因信法師

まくはくをもつてはくまをもつてからよからぬ令下るをせ
西行法師がまくはくをもつてからよからぬ令下る
アカシハラムサツテ因信法師の許よ

つづけ

寛慈法師

アカシハラムサツテ因信法師の許よ
セイ 因信法師
アカシハラムサツテ因信法師の許よ
さわさわ

千載和歌集卷第十

哭奇

みよたまくげ時多ねはにやせ院り
もろこしハ陸内院とよもろの世方
て竹生年めとづらとす薄せれまよ

ヤセトマスケ

院肺弱

いよきとばかりかくらむく行やまうるの

後之陸内院

うてちよきかのびのびとす千代ハミテモ

おもとおもとえ緩脚

いよきとよみうみみけ行ひませよくよけをすけ
祝乃はまくまくけ

人官前と改名

志代ハ本のむじつるのとじまくハアトとまく
極行及以時立との期よよのひつまく
（まよ）弓矢ハ夢一け

源ノ口音和

志代ハ本のむじつるのとじまくハアトとまく
同席時底宮とて花枝近年といひてモテ
のものとてうきよとておけりとてを詠す

源河尾御製

すとよむてちやうすすく桜花梢どもかくらひる
まおはに佐わりませぬよてのこへを花年
へといふとわきこれつゝじよふくうく候

侍まも　大和云忠教

がまくわ年の桜よそ先年と早もぬるはま
施河尾は時を知る事一月也の日也これを
いづくらみ仿け

權中御三復生

すとよむしはのけのさまあすまうよやうとく門
白河尾はぬよハナリヤケ、時ね松並
年とどくさむとく仿け

原中御三復生

神代より三番やうとせんすとくよねのねをま
京極本と改名のて陽徳のゆの可
よ税のちんとくま
本ちんやうとせんすとくよねのねをめのね
二陸をもと本宮殿のて陽徳のゆの可
幸徳と松枝映水とくよくよくよくよくよく

まね本と改名

おやかにうのまのあすはれとまちけがまし
ほりほりすきなむけゆるひのく
をよみ

二度と金をかねぬ

おもむくねうきえんじゆめのむとく
おもむくねうきえんじゆめのむとく

税のまこと

義思と

たくらのくじものぼとせうじとくじと
保延三年法金剛院下河東有り萬葉
多秋といふと傳され仍まうは候竹

け

法華の題在を改と見

花園山

八重山のまつまつと花のあすは
八重山のまつまつと花のあすは

千早松林のまつまつと花のあすは

うそすきやまうす税のまつまつと花のあ

素山花満

おもむくのまつまつと花のあすは

二度院のまつまつと花のあすは
花有るが毛といふとまつまつと花のあすは
候竹も

五のまつまつと花のあすは

おまかせ候ふ
おまかせ候ふ
おまかせ候ふ
おまかせ候ふ
おまかせ候ふ

之をかくして百姓の心をもよおしやうの如きの内
務政大臣より侍候する所可らずせひ事
はれ乃ちみそましに預け

白雲山人之復出

主はまことにかのうへんをもつてやのじきとすハ御
二条院御時大炊門を金の内裏より移す
よたす東西の町のあそびをうけ詩す
清仙ノ子の病歎也年とどくとく

國の事は松本と之に
人通す事の有る所

源通德和元

万代の事はわざとそれだけにあつたのであるが
も金匱の時門真一よりて仰きよう
は万歳おとおせにさげてさへさへ
じきにまことの日向のあひて仰き

能の事のよし代はてかくはんをうけたるに
入道をもとめ申すのよしとまひき
時松のよしとま

附録文歌

じよてのよしのよしのよしのよしのよしの
被後限ねだの体えのよしと植るあらうす
せうすいよし　　豊前守

かうのよしのよしのよしのよしのよしのよしの
とくにうれだわるのよしとまわるま
時松のよしとま

巻尾題

文代とよてゆかむのよしとまわるま
後一章度以てせん年大書令主基
方内屏風上飯中國也田山のよしと
冬、じよかみのよしとまわるま

美濃の頃ねに

まごのあうとおとすすみのめのね
自らは時がほえ年大嘗令と墨方
稀春神回すよも

前中納言房

文平旅神回りのいはれ月とどくうひし
佐の此時久き二年大嘗令の祭祀方風
俗守邊に回わねのゆきを後る

宮内式水丸

正月の御内儀の御内儀の御内儀の御内儀
平治元年大嘗令但紀方風俗守邊
國千波浦をよめ

美濃後置

まごの教よ生つてゆふよちうのまご
國大嘗令と墨方稀春神回すよも
持てよも 刑部式範立
まごの教よ生つてゆふよちうのまご
す食は此時に安三年大嘗令但紀方
の内儀の守 宮内式水丸
まごの教よ生つてゆふよちうのまご

今この時え慶え年々嘗々此紀す内
俗すと祚山御も

恭厚季御明氏

とすちあらニ神ノ御しや座をあひばの
事一だまし

九州大學圖書印

